

生活世界における心

——意識の問題と現象学の自然化——

呉羽 真

0. 序

近年、認知科学の展開の中で、心を自然科学の枠組みの中で理解しようとする「心の自然化」の動きが活発になっている。これに対して、心の哲学者たちの中には、意識経験には物理的に還元不可能な主観的ないし現象的性格がある、ということを描し、心の自然化を推進する上で前提されている物理主義、すなわち意識を伴う心の状態が、(機能的説明を含む) 物理的説明によって分析し尽くされる、という立場に異論を唱える者たちがいる(e.g. Nagel, 1974, Levine, 1983)。意識経験に関する物理的説明のこうした不十分さは、「説明ギャップ」(Levine, 1983)と呼ばれる。いかにして説明ギャップを架橋し、意識経験に自然化された説明を与えることができるか、という「意識の問題」に対して、現在では、あくまで物理的説明によって意識を還元、消去しようとする立場から、こうした還元可能性を否定し、意識を物理主義的に理解することは不可能であるとする、「ミステリアン」と呼ばれる立場まで、様々な立場が並び立っている。

その一方で、これらの立場とは別に、意識の科学の不十分さを描し、一人称的アプローチに訴える必要を主張する声も出ている。その代表例が、フッサールによって創始された現象学に則って意識の問題を解決しようとする、ヴァレラの「神経現象学 (neurophenomenology)」(Varela, 1996)や「現象学の自然化」(Roy, Petitot, Pachoud & Varela, 1999)である。これらを、意識の問題に対する「現象学的アプローチ」と総称しよう。フッサール現象学は、意識経験の還元不可能な本性から出発し、それを特殊なタイプの反省に基づいて、一人称的に記述することを課題とする。この一人称的記述という方法は、三人称的視点に基づく自然科学の方法と対比を成す。しかし、ヴァレラらの現象学的アプローチは、科学的な研究プロジェクトであり、そうである以上、意識経験についての現象学的記述は、自然科学の枠組みの内に統合されなければならない。

本稿の目的は、意識の問題に対する現象学的アプローチの可能性を吟味することにある。その際、フッサールが意識の自然化に異論を唱えた反自然主義者であったと考えられている以上、現象学の自然化の妥当性に関する問いが中心問題となるであろう。この点は、現象学的アプローチに属する論者たちによって、十分に明らかにされているとは言い難い。

そこで、本稿では、フッサールの論述に立ち還りつつ、彼らの議論を再構成する。

現象学的アプローチの可能性を評価するには、この他に、それが経験的レベルの事例研究で成果を挙げることができるか、という点を検討する必要があるが、本稿ではこれに触れることはできない。

1. フッサールの科学批判と伝統的意識観の問題

フッサール現象学は、科学批判の性格を色濃く持つ。フッサールは特に一貫して、近代の心理学が自然主義に囚われていることを批判した。自然主義とは、存在するものすべてが自然、それも「第一義的には」物理的自然に属し、これらの自然を規定している法則は、自然科学的方法によってのみ認識される、と考える立場である(SW)。近代の自然科学は、ガリレイにおけるその成立以来、「自然の数学化」をその方法としてきた。すなわち、近代科学は、数学的に記述可能なもののみを自然と見なし、こうして記述される物理的規定以外の諸規定を捨象したのである。自然科学的方法が支配的になるにつれて、自然科学によって捉えられた客観的自然のみをそれ自体で存在する真の実在と見なす「客観主義」が生じ、さらにデカルトの下で、それ自体で存在する客観的自然と主観的な心とを対立させる二元論が出現する(Krisis, chap. 10)。二元論において、意識は「それ自体では世界と関係を持たない容器」(Zahavi, 2003a, 邦訳, p. 18)のようなものと考えられる。

近代の心理学は、数学的自然科学を模範にしてきた。そこでは、意識もまた物理的自然に随伴する（すなわち、それに従属して変化する）心的自然として、自然科学的方法によって解明されうる、ということが前提されたのである。フッサールは、心理学によるこうした意識の自然化を批判し、〈自然の構成要素ではない、純粹意識の領野が存在する〉(Ideen I, S. 95)というテーゼに要約される、反自然主義の立場をとったとされる。

現代の認知科学における「心の自然化」の動向は、近代心理学の自然主義を引き継ぐものとして位置づけられる。心の哲学におけるミステリアンたちはこうした自然主義ないし物理主義に異議を呈するものと見なされる一方で、対立しあう両者の間では一つの共通の意識観が前提されていると言える。これが、「意識／自然」の二元論に基づく意識観である。すなわち、意識はあらかじめ自然科学の対象である客観的世界から排除されるような主観的な性格を持つ、ということが前提されているのである。この前提ゆえに物理主義者は意識の存在を否定し、ミステリアンは意識と自然の対立を主張するのである(cf. 村田, 1994, pp. 121-122)。いずれにせよ、こうした意識観に基づく限り、意識を持った心を自然化することは原理的に不可能になる。

二元論的な意識観に対して、フッサールによれば、意識経験は、「何かについての意識で

ある」、すなわち世界へ開かれている、という「志向性」によって性格づけられる。現象学は意識と対象との間の相関関係を研究し、意識が「主観的とか客観的とかいった概念が最初に生じる基盤」(Varela, 1996, 邦訳, 129 頁)であることを明らかにする。ここに、フッサール現象学を、意識と自然との関係を考察する試みとして、すなわち意識の問題に対する一つのアプローチとして評価する可能性が開けてくる。

2. 現象学的記述の戦略

2.1 現象学的還元

フッサールは、意識経験を研究するためには、特殊な方法——「現象学的還元」が必要になる、と言う。ヴァレラはこの「現象学的還元」の方法を「必然的な出発点」と見なす。それでは、現象学的還元とは何だろうか。この点をフッサールに従って説明しよう。

フッサールは、通常の我々の生活や、通常の学問のすべてがそこにおいて営まれているところの習慣的な態度を、「自然的態度」と呼ぶ。フッサールによれば、自然的態度において我々が事物を経験する際、我々の関心はもっぱらこの事物に向けられており、意識経験には向けられていない。意識経験はこのように習慣的に自己を忘却するのであり、反省によって初めて意識経験そのものが開示されるのである。

しかし、意識経験の本性を明らかにするためには、自然的態度に留まったまま遂行される反省では不十分であり、現象学的還元によって態度を変更しなければならない。自然的態度において我々は常に、世界が存在していると信じているのであり、フッサールの表現では、意識を超越した世界の存在に関する「一般定立」を遂行している。この際、意識もまた、身体と連結され、超越的世界の内部に属する「心理学的意識」として実在化される。心理学は、自然的態度の一般定立の下で、意識を自然の中に位置づけるのである。

現象学的還元によって我々は、一般定立に「エポケー（判断中止）」を加えてこれを遮断し、この定立によって成り立つ世界を「括弧に入れる」。また、この際、自然的態度を前提している諸科学をも遮断する。エポケーは世界の存在を否定することを意味せず、世界の存在に対する信念は、その妥当性を保留されたままで維持される。還元の結果得られるものは、心理学的意識と対比される「純粹意識」の領域である(Ideen I, sec. 30-32)。しかし純粹意識は内容空虚な領域ではなく、それは経験に与えられる限りでの世界をその志向的相関者として伴う。ただし、現象学的還元の下で、世界はもはや意識から独立した存在とは考えられない。志向的相関者である世界内部の対象は様々な「意味」を持って現れるが、こうした意味は純粹意識によって与えられるものと考えられる。自然は、純粹意識の意味付与作用によって「構成」されたものとしてのみ存在しうる。世界を構成する意識という

意味で、純粋意識は「超越論的主観性」とも呼ばれる。心理学的意識がこうした自然の中に位置を占めるのに対して、純粋意識はそれ自身意味付与によって存在するのではなく、自然の構成要素ではない。

2.2 還元の必然性および内観主義との相違

現象学的還元が「必然的な」方法であると考えられるのはなぜだろうか。その理由を考える上で、ロイドの次のような記述が参考になるだろう。

一人称的観点の中には、主観と世界の関係についての直接的な観察が含まれない。その対応関係は、主観の視点からは決して見えない。要するに、経験された実在は、通常の意味での〈本物の〉実在とは切り離して考えられねばならないのである。(Lloyd, 2004, pp. 251-252)

ここで、「経験された実在」、「〈本物の〉実在」とは、それぞれ意識の志向的相関者として見られた世界、定立された世界を指す。一人称的観点にとって、意識から独立に、その外部にある世界、というものは考えられない。従って、こうした観点に立つ限り、意識と世界が独立に存在すると考える二元論は維持しえない。我々の習慣的思考を深く規定している二元論は、自然的態度における世界とその内部に属する意識それぞれの定立に根を持つと言える。定立を遮断し、意識から独立に存在すると考えられた世界を括弧に入れる現象学的還元は、意識の問題の解決を阻んでいる二元論から我々を引き剥がし、意識と世界との相関関係へと目を向けさせる。こうして明るみに出された純粋意識の領域は、存在論的解釈から純粋な領域と考えられる。

現象学は、しばしば内観主義の一種と見なされてきた。しかし、両者が同一のものであるならば、一人称的アプローチのうち、特に現象学を採用せねばならない理由はなくなる。それでは、両者の違いはどこにあるのだろうか。

内観とは、自己の内的な心的過程を自ら観察する方法である。これに対して、現象学はある個人の私秘的な心的内容には関心を持たず、意識経験の構造についての間主観的に妥当な記述を目指す。また上のように「内部」と「外部」の二元論的対置を前提している点で、ヴァレラが指摘するように、内観主義は「まだ自然的態度に囚われたものである」(Varela, 1996, 邦訳, 127 頁)と言える。これに対して、現象学は、現象学的還元の態度に基づいて、「(「外部」が存在しないがゆえに)「内部」といったことが意味を成さないような、意識と世界との相関関係を研究するのである。

2.3 生活世界を通過する還元の道

フッサールはその後期に、「超越論的」現象学によって何が得られるかを明確化するために、現象学的還元を介して超越論的主観性に至る「生活世界の道」と呼ぶべき道を提示する(Krisis, chap. 43)。

生活世界の道において手引きとなる「生活世界」とは、「我々の全生活が実際にそこで営まれているところの、現実直観され、現実経験され、また経験されるこの世界」(Krisis, S. 51)、あるいは「常に問われるまでもない自明性のうちに与えられている感覚的経験の世界」(ibid., S. 77)のことを指す。主観的 - 相対的な生活世界は、客観的科学がそこから意味を汲み上げてくる基底であると共に、科学的知識がそこにおいて検証されるべき明証性の源泉でもある。しかし、客観的科学は、経験に与えられたものを測定によって数学化し、この測定の仕方を精密化していった極限に経験に与えられることのありえない理念的对象を考える「理念化 (Idealisierung)」の方法によって、生活世界を乗り越える。また、この方法の適用範囲が世界全体に及ぶにつれて、科学の対象である客観的自然が理念化という方法によって生み出されたこと、科学が生活世界のうちに基盤を持つことが忘れ去られる。「生活世界の道」は、まず客観的科学の領域から忘れられた生活世界へと還帰し、さらにこの生活世界もまた素朴にあらかじめ与えられているだけでなく、超越論的主観性によって構成されたものであるという観点から、超越論的主観性へと遡行する、という二段階の還元を通過する。この際、生活世界は、科学的世界の意味および明証性の「地盤」としての機能と、超越論的主観性による構成作用の所産として、超越論的分析へ至るための「手引き」機能との二つの機能を持つ(cf. Claesges, 1972)。生活世界は、差し当たりそれが科学的世界の地盤として導入される際には、科学的世界に先立って与えられる感覚的経験の世界と考えられるが、そこから超越論的主観性に遡行する際には、それは「我々の全生活が実際にそこで営まれているところの」世界として、自然的態度における感覚的経験のみならず、客観的科学によって出会われる世界をも含むものと考えられる。フッサールはこの点について、次のように述べる。

具体的な生活世界は、〈科学的に真の〉世界に対してはそれを基礎づける基盤であるが、それと同時に、生活世界独自の普遍的具體相においては科学を包括するものである。
(Krisis, S. 134)

2.4 記述戦略の問題

ここまで述べてきた現象学的記述の戦略に関して投げかけられうる批判を見ていこう。

まず、態度変更において、同じ意識が、世界内部に存在する経験的主観性とも、そのうちで世界が構成される超越論的主観性とも捉えられうる、という主張には逆説が含まれているように思われる。メルロー＝ポンティは、この点について、「我々は世界のうちに存在しているのであるから、(中略) 我々の一切の思惟を包摂するような思惟などは存在しない」(Merleau-Ponty, 1945, pp. viii-ix)と述べる。そこで彼は、「徹底的な反省は自分自身が非反省的生活に依存していることを意識しており、この非反省的生活こそ反省の端緒的かつ恒常的かつ終局的な状況である」(ibid., p. ix)がゆえに、「還元の最も偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということである」(ibid., p. viii)と看破した。つまり、このように現象学的還元の出発点が自然的態度にあり、その遂行中にも自然的態度が還元の態度のうちに不断に混入してくるのであれば、我々は純粹意識を確保しえない。むしろ、意識から一切の存在論的解釈を剥ぎ取ってこれを分析、記述できるという主張は、「所与の神話」の一種とも言う。

さらに、心の自然化という文脈において生じた意識の問題に対する解決策としては、意識を自然の構成要素ではなく、逆に自然を構成する超越論的主観性と見なすというフッサールの戦略をそのまま受け入れることはできない。この点に関しては特に次章で論じよう。

3. 現象学の自然化の妥当性

3.1 自然化の戦略

『現象学の自然化』の編者たちが「自然化された」ということで意味するのは、「そこで受け容れられうるすべての性質が自然科学によって認められた諸性質と連続的であるような説明の枠組みの内に統合されている」(Roy, et al., 1999, pp. 1-2)、ということである。この際、少なくとも、二元論的な存在論に与しない、ということが要求される。そこで、自然化の問題は、いかにして物理的諸性質と心的諸性質の間の見かけの異種性を消し去り、心的諸性質を物理的諸性質に翻訳することができるのか、というものになる(ibid., pp. 19, 43-46)。

この問題に対して彼らは、存在論的カテゴリーを見直すことを提案する。彼らによれば、コンピュータおよび情報理論と、自己組織化についての数学的理論の発展によって、物理的なものと心的なものという二つの存在論的カテゴリーにまたがる新しい要素が発見されつつある。彼らの自然化戦略は、以下のものになる(ibid., p. 48)。

- (1) 現象学的記述によって、心的現象に十全な性格づけを与える。
- (2) 物理的なものにも心的なものにも適用可能なアルゴリズム (上記の「新しい要素」)

を用いて、心的現象を数学的に再構築する。

(3) 心的現象の数学的再構築物を自然科学へと統合する。

ヴァレラは、「神経現象学の作業仮説」として、次のように言い表される「相互制約 (mutual constraints)」の戦略を採用する。

経験の構造の現象学的説明と認知科学におけるその対応物は、互いに補足しあう制約関係によって相互に関係している。(Varela, 1996, 邦訳, 133 頁)

すなわち、これら二つの説明は、互いに他方の研究方向を限定するという仕方で発見的に用いられることができる、と仮定されるのである。神経現象学において二つの説明をつなぐものは、主に力学系理論に由来するツールである。

現象学的アプローチが採用する自然化の戦略の要点は、現象学と神経生理学との両者を、力学系モデルを適用することによって「数学化」することにあると言える。

3.2 フッサールの反自然主義の動機

前節で見たような自然化の主張は、フッサールの反自然主義の立場と根本的に対立する。そこで、現象学と自然科学は本来相容れないものであり、自然化することによって現象学の本質は失われてしまうのではないのか、という疑念が当然生じる。これに対して『現象学の自然化』の編者たちは、フッサールの反自然主義を、その動機を批判することによって克服しようとする。

彼らによれば、フッサールの反自然主義には科学的な動機が介在する(Roy, et al., 1999, pp. 39-43)。フッサールは、ある領域に属す対象の必然的な本質を探究する「本質学」のうちで、一義的、精密な理念的本質を扱う「精密な」本質学と、流動的な対象領域における「不精密」で漠然とした形態学的本質を扱う「記述的な」本質学を区別する。数学的自然科学の扱う本質が精密な本質に属するのに対して、意識は流動的であるので、意識の本質は形態学的本質に分類される。従って、形態学的本質を持った意識についての数学的自然科学は原理的に不可能であることになる。そこでフッサールは、数学化という自然科学の方法ではなく、形態学的本質の直観と記述を用いて意識を研究する現象学を構想したのであった(Ideen I, sec. 72-74)。

『現象学の自然化』の編者たちによれば、フッサールの時代には不可能であった意識についての数学的自然科学が、科学の進歩によって、現代では可能になっている。つまり、力学系モデルを用いることによって、意識の不精密な本質についての形態学的かつ数学的

な記述が可能になっているのである。こうした数学的記述を用いて意識を自然化することができる(Roy, et al., 1999, pp. 54-56)。

これに対してザハヴィは、フッサールの反自然主義は、主として科学的理由ではなく、数多くの哲学的理由によって動機づけられている、と指摘して、「現象学の自然化」の自然化戦略を批判する(Zahavi, 2004)。主なものと考えられる哲学的理由を挙げておこう。

一つには、第1節で述べたように、「意識／自然」の二元論を前提する自然科学に訴えることによって、意識の本性を捉えることができない。意識と世界との相関関係を捉えるためには、現象学的還元によって自然的態度の一般定立を自然科学諸共遮断しなければならない。

もう一つには、自然の数学化という方法は、主観的 - 相対的な生活世界を隠蔽し、それに覆い被された「理念の衣」にすぎない科学的で客観的な世界を真の存在だと思い込ませてしまう(Krisis, S. 52)。ガリレイによるこうした隠蔽の結果、近代科学は、我々の生活に対する「意味の空洞化」を招き、危機に陥っている、とフッサールは診断する。そこで彼は、生活世界の経験という起源へ還帰し、そこから世界に対する意味付与の足跡をたどり直そうとするのである。心的現象の数学化という戦略は、こうしたフッサールの歩みに逆行することになる。

3.3 「生活世界における心」の観点

ザハヴィは「現象学の自然化」に対して、『現象学の自然化』の編者たちが現象学の超越論的次元を無視していると批判する。しかし、フッサールに倣って、意識を超越論的主観性として解明しようとすることは、意識の科学的解明を断念することに等しい。ザハヴィの批判を考慮すれば、現象学を有意味な仕方では自然化する試みは、絶望的であるように思える。

なるほど、ヴァレラや『現象学の自然化』の編者たちは、自然化の戦略をとるに際して、現象学の超越論的次元を無視しているように見える。しかし、ヴァレラ、ロイドらが現象学的還元を重視していること、そして彼らの提案する意識観が意識の「内部／外部」といった二元論的枠組みを克服しえていることのうちには、還元によって開かれる現象学の超越論的立場が暗黙のうちに反映されていると言ってよい。

そこで、彼らの自然化戦略をフッサールに立ち還ることによって補足し、現象学の自然化の可能性を探りたい。注目すべきは「生活世界における心」という観点である(cf. 村田, 1994)。フッサールの言葉を引けば、

根本的省察から発する問いは今次の点へ向けられる。すなわち、世界において、つまり生活世界において、心とは——さしあたり人間の心とは——何であり、いかにあるのか。(Krisis, S. 215)

フッサールは「生活世界における心」の観点を、主観性についての超越論的分析に至る出発点ないし手引きとするのであるが、自然化という文脈においては、逆に現象学的還元およびそれに続く超越論的分析を手引きにして、生活世界における心に向かうという道がとられなければならない。この際に現象学的還元は、経験的主観性から超越論的主観性への全面的移行のための手段としてではなく、自然的態度において心を世界のうちに位置づける仕方の見直しのための方法と解される。前者、すなわち還元による超越論的主観性への全面的移行の可能性については、既にメルロ＝ポンティの批判を見た(第2.4節)。それでは、後者の自然的態度の見直しということは何を意味するだろうか。まず、科学の対象である物理的自然も、生活世界も、共に自然的態度において定立されるものとして、それぞれがある種の自然という地位を占める。しかし、物理的自然が経験から独立した客観的な世界と見なされるのに対して、生活世界は、現実を経験される主観的・相対的な自然として、経験する主観(超越論的主観性)との相関関係において考察される。

さて、このような生活世界に位置づけられることによって、心はどのような特徴を持つだろうか。上の引用箇所が続いて、フッサールは執拗に生活世界における心と身体との関係を問いただしている。このことが示唆するように、生活世界における心は、身体との特殊な結びつきによって特徴づけられる。しかしこれは、近代心理学が考えるように、単に心が物理的自然に随伴するということの意味するのではない。むしろ、生活世界は身体によって生きられる世界であり、そこにおいては心(主観)そのものが経験の媒体として身体を必然的に伴うと考えられる。ただし、これはフッサールよりむしろメルロ＝ポンティの見方であるが、この点について詳しく述べることはできない(Merleau-Ponty, 1945)。

現象学的アプローチは、説明ギャップを架橋し、意識の問題を解決することができるだろうか。なぜ脳のような物理的システムから意識経験が生じるのか、といういわゆる「意識の難問」(Chalmers, 1996)は、それが前提している二元論的枠組みを括弧に入れることによって、解消される。これに対して、説明ギャップ、つまり意識経験についての三人称的、物理的説明の不十分さは、科学的な問題として扱われるべきである。フッサールの科学批判を考慮すれば、これは自然科学において(その方法によって)生じた意味の空洞化の一種と見なすことができる。つまり、意識についての三人称的説明が我々の生活に対する意味を失っていることが、意識経験が主観的性格を持つためにはっきりと露呈してきたので

ある。フッサールに従えば、この問題に対するに、生活世界への還帰を以てしなければならない。

フッサールの「直接感受されるままに経験された世界への還帰」(Varela, 1996, 邦訳, 124頁)に賛同するヴァレラも、生活世界における心、という観点に定位していると考えられる。生活世界における心の探究という文脈において、一人称的な現象学的記述と三人称的な認知科学的説明との関係は、単に互いの研究方向を制約し合うに留まらない。現象学を意識の科学に導入することは、自然科学的方法によって取りこぼされる意識経験の生活（ないし経験そのもの）に対する意味を取り戻し、認知科学的説明を根拠づけることになる。逆に、認知科学的説明を導入して現象学を自然化することは、科学の妥当性にエポケーを加え、これを現象学によって基礎づけようとするフッサールの意図に反するものであることは否めない。しかし、現象学の自然化は、科学的知識を生活世界との連関のうちに置き直そうとするフッサールの科学批判を経験的レベルで実質化し、またその現象学的記述を、具体的なモデルを用いて検証し、根拠づけることを意味する。このことの有意義性をこそ評価すべきであり、自然化を意味の空洞化として斥けるべきではない。現象学的記述と認知科学（特に神経生理学）的説明とが形成するこの根拠づけの循環こそが、ヴァレラが提示する相互制約という作業仮説の意味である。意識の解明はこうした循環プロセスの中で進展すると見通される。

3.4 力学系としての意識

自然化の戦略において現象学的記述を数学化するために力学系理論のツールが用いられることは第3.1節で述べた。ヴァレラとトンプソンは、「力学系認知観」に基づき、力学系モデルを用いて意識を解明しようとする「イナクティブ・アプローチ (enactive approach)」(Thompson & Varela, 2001)を提唱する。これについて解説しよう。

力学系認知観によれば、認知システムは、時間とともに変化し、互いに影響しあう複数の状態変数から成る。そして認知とは、力学系を構成する諸状態の、規則に従った相互依存的な発展である。変数同士の相互作用は「カップリング」と呼ばれる。脳、身体、環境の間の複雑な相互作用は、一方向的な表象関係では捉えることができず、相互的なカップリング関係と見なされなければならない。複数のシステムがカップリングされ、相互依存的に発展する場合、これらを単一のシステムと見なしてよいので、認知システムは、脳、身体、環境の三者を含んだ、単一の統合されたシステムであると言える(cf. van Gelder, 1995)。ヴァレラらは力学系認知観を意識の神経科学に適用し、次のような主張を行う。

意識にとって決定的なプロセスは、脳内の神経イベントに限定されるものではなく、脳 - 身体 - 世界という区分を横断するプロセスである。(Thompson & Varela, 2001, p. 422)

力学系モデルを採用することの利点は、意識の不精密な本質を数学的に記述することができるという点にのみあるのではない。まず、力学系においては、環境の状態もシステムを構成する変数の一つとして扱われるのであり、ここにシステムの「内部／外部」といった二元論的区別はない。この点で力学系は、意識に関する一人称的記述をモデル化するのに適している。また、経験の身体性に着目する点でも、イナクティブ・アプローチは現象学の「生活世界における心」という観点と関心を共有している。イナクティブ・アプローチは未だ仮説に留まるものであるが、現象学的アプローチは、意識の様々な側面に対応した事例研究において、力学系モデルが現象学的記述を具現化しうるか否かという観点からこれを検証しながら、研究を進める。

4. 「現象学的自然主義」とその展望

本稿は、意識の問題に対する現象学的アプローチを、フッサールに立ち還りつつ自然化という方針に沿った仕方で再構成した結果、「現象学的自然主義」の立場に到達した。これは、以下のような諸テーゼによって特徴づけられる立場である。

- [1] 意識は自然である。ただし、ここでの自然とは、科学的自然でなく、それを含んだ生活世界全体を意味する。
- [2] その方法である現象学的還元は、超越論的主観性への移行でなく、超越論的分析を介した自然的態度の見直し、「生活世界における心」の発見のための方法と理解される。
- [3] 意識の解明は、一人称的な現象学的記述と三人称的な認知科学的説明の両者を用いて進められる。

本稿の結論は、現象学的アプローチは、このような「現象学的自然主義」の立場に立つときにのみ、意識の問題を解決する可能性を秘めている、ということである。

文献（紙数の都合上、本文中で邦訳の引用箇所を指示した場合を除き、邦訳を挙げない）

(1) フッサールの文献

‘Philosophie als strenge Wissenschaft’ (SW), In *Aufsätze und Vorträge(1911-1921)*, hrsg. von Th. Nenon und H. R. Sepp. Husserliana Bd. XXV. Den Haag: Martinus Nijhoff. (1987).

Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie (IdeenI), Tübingen: Max Niemeyer. (1913, ²1922, ³1928).

Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie (Krisis), hrsg. von W. Biemel. Husserliana Bd. VI. Den Haag: Martinus Nijhoff. (1954, ²1962).

(2) それ以外の文献

Chalmers, D. J. (1996). *The conscious mind: In search of a fundamental theory*, New York: Oxford University Press.

Claesges, U. (1972). ‘Zweideutigkeiten in Husserls Lebenswelt-Begriff’, In U. Claesges & K. Held (Eds.), *Perspektiven transzendental-phänomenologischer Forschung, Phänomenologica* 49 (S. 85-101), Den Haag: Martinus Nijhoff.

Levine, J. (1983). ‘Materialism and qualia: The explanatory gap’, *Pacific philosophical quarterly* 64, 354-361.

Lloyd, D. (2004). *Radiant cool: A novel theory of consciousness*, Cambridge, MA: MIT Press.

Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard.

村田純一 (1994). 「意識—その科学と現象学」, 新田義弘他編, 『岩波講座現代思想 10—科学論』(109-138 頁), 岩波書店.

Nagel, T. (1974). ‘What is it like to be a bat?’, *Philosophical review* 83, 435-450.

Roy, J.-M., Petitot, J., Pachoud, B., & Varela, F. J. (1999). ‘Beyond the gap: An introduction to naturalizing phenomenology’, in Petitot, Varela, Pachoud, & Roy (Eds.), *Naturalizing phenomenology: Issues in contemporary phenomenology and cognitive science* (pp.1-80), Stanford: Stanford University Press.

Thompson, E. & Varela, F. J. (2001). ‘Radical embodiment: Neural dynamics and consciousness’, *Trends in cognitive science* 5(10), 345-381.

van Gelder, T. (1995). ‘What might cognition be, if not computation?’, *The Journal of Philosophy* 91(7), 345-381.

Varela, F. J. (1996). ‘Neurophenomenology: A methodological remedy for the hard problem’, *Journal of consciousness studies* 3(4), 330-350. (2001, 河村次郎訳, 「神経現象学—意識のハード・プロブレムに対する方法論的救済策」, 『現代思想』第29巻第12号, 118-139 頁.)

Zahavi, D. (2003a). *Husserl's phenomenology*, Stanford: Stanford University Press. (2003, 工藤和男・中村拓也訳, 『フッサールの現象学』, 晃洋書房.)

—— (2004). ‘Phenomenology and the project of naturalization’, *Phenomenology and the cognitive science* 3, 331-347.